

《聖書》マタイによる福音書 6:24-34

現実の諸問題

私たちは現実^{げんじつ}に起こっている諸問題^{しよもんだい}に悩まされています。世界の問題^{せかい もんだい}や、国内の問題^{こくない もんだい}といろいろあります。これらの問題は毎日の生活^{まいにち せいかつ}と常に密接^{みつせつ}につながっています。もちろん、直接的^{ちよくせつてき}に影響^{えいきょう}のあるものから、間接的^{かんせつてき}に影響^{えいきょう}のあるものまでありますが、どれを取ってみても私たち^{わたしたち}と関係ないものはありません。

ではどうすれば、これらの諸問題^{しよもんだい}を解決^{かいけつ}することができるのでしょうか。

宗教はアヘンか

長い間^{なが あいだ}、キリスト教^{きりすと せかい}の世界^{げんじつ}では、現実^{げんじつ}の諸問題^{しよもんだい}に対してあまり関心^{かんしん}を示さない人が多かつたし、今だにその状況^{じやうきやう}が続いています。キリスト者^{しや なか}の中にも、現実^{げんじつ}の諸問題^{しよもんだい}に立ち向か^むっていかうという人がいますが、まだまだ少ないです。

どうしてこのようになったのでしょうか。今日の福音書^{きょうふくしんしょ}を読むと、現実^{げんじつ}の諸問題^{しよもんだい}についてよく悩ま^{なや}ないで、神^{かみ}に頼^{たよ}ってれば、神^{かみ}がきつといいようにして下さるとい^{こた}う答え^{こた}が出てきます。その結果^{けつこ}、キリスト者^{しや げんじつ}は現実^{げんじつ}の諸問題^{しよもんだい}に目^めを向^むけるよりも、

教会^{きやうかい}や家^{いえ}で祈^{いの}ってればよいという姿勢^{しせい}を取^とるようになりました。

マルクスが宗教^{しゅうきやう}はアヘンであると言^いったのは、まさにこのことを問題^{もんだい}にしたのです。しかし、マルクスが指摘^{してき}するまでもなく、聖書^{せいしよ}の箇所^{かしょ}をよく読^よむと、「何^{なに}よりもまず、神^{かみ}の国^{くに}と神^{かみ}の義^ぎを求めなさい」と書かれています。

「神^{かみ}の国^{くに}と神^{かみ}の義^ぎ」は、日本人^{にほんじん}にとっても、現代人^{げんだいじん}にとってもわかりにくい言葉^{ことば}です。これは、ただ神^{かみ}のことだけ考^{かんが}えていればよいということではありません。神^{かみ}の義^ぎとは、正義^{せいぎ}のことであり、不正^{ふせい}をゆるさないことです。

この箇所^{かしょ}で言^いいたいことは、ただ自分^{じぶん}たちの利益^{りえき}だけを考^{かんが}えず、回^{まわ}りにいるすべての人の利益^{りえき}も考^{かんが}えよということです。神^{かみ}の義^ぎとは、すべての人^{ひと}が一人も無視^{むし}されず、一人一人^{ひとりひとり}が人間^{にんげん}として認め^{みと}られることです。

自分^{ぶん}がいかに食^たべようか、いかに着^きようかというこ^{なや}で悩^{まわ}むより、回^{まわ}りの人^{ひと}が本^{ほん}当^{とう}に人間^{にんげん}らしい生活^{せいかつ}ができるように悩^{なや}むのです。そうすれば、自然^{しぜん}に自分^{じぶん}たちも人間^{にんげん}らしい生活^{せいかつ}を送^{おく}ることができます。この点^{てん}をはつきりさせないと、宗教^{しゅうきやう}はアヘンのま^{なや}まです。

年間第8主日A年 (瀧野正三郎)